

西洋中世学会第 17 回大会 (2025 年) 自由論題報告要旨

2025 年 6 月 14 日 (土)

於 東京大学

1. 足立 広明 ADACHI Hiroaki (奈良大学)

プロバとエウドキア

— 古代末期の女性詩人と cento 文学の伝統 —

古代末期を特徴づけるもののひとつに cento 文学の伝統がある。Cento とはラテン語で継ぎはぎ細工、ギリシア語では針細工 τὸ κέντρον, ὁ κέντρον などを原意とするが、これが古代末期には過去の作品から転用した文章で作成した新しい文学作品を指すようになり、同時代を特徴づけるひとつの文学ジャンルに発展した。Cento 文学については、従来古典古代の亜流ないし衰退を語るものとして貶められてきたが、前世紀末以来の古代末期研究の進展のなかで、新しい同時代的意味をもった創造的な文学として再評価されるようになってきた。

その作品群のなかでラテン語圏ではウェルギリウス、ギリシア語圏ではホメロスの叙事詩の文言を引用、シャッフルして聖書物語とする聖書叙事詩と呼ばれる作品群が生起した。本発表は、そのなかでラテン語圏のプロバ、ギリシア語圏のエウドキアの二人の女性詩人の作品を取り上げて比較する。この二人はそれぞれの文化圏を代表する cento 詩人であるだけでなく、男性作家の手を経ることなく女性自身の声を直接伝える点で極めて貴重である。二人に共通するのは、古典作品とも聖書とも異なる独自の積極的な役割を女性登場人物に与えていることである。たとえばプロバは悲恋に終わるカルタゴの女王デイドとアエネアスの関係をイエスと弟子たちの関係に置き換えて肯定的に語る。また、彼女は巫女の予知能力の描写を用いて、ヘロデの奸計をいち早く察知してエジプトに逃れる聖母マリアの賢明さを描く。彼女の作品をおそらく先行事例として知っていたエウドキアの作品では、この傾向はさらに顕著となる。新約聖書の女性たちは、ホメロス作品中のナウシカアやペネロペイア、アンドロマケ、ヘレネなどの王族女性たちの言葉を借りて雄弁に自己を語る。受胎告知の場面で聖母マリアはオデュッセウスを迎えるペネロペイアの慎重さを示し、またイエスの死に際してはヘクトルの死を悼むその妻アンドロマケの言葉で嘆く。この場面はミケランジェロのピエタに千年先行する聖母の嘆きの最初期の作例となっている。このことは、聖母崇敬の誕生が男性教会作家だけでなく、女性の関与からも生まれた可能性を示唆している。

もうひとつ、発表者が注目しているのは彼女たちの作品内に現れる男性登場人物である。古代の古典作品でも中世の聖人伝でも活動的な女性がしばしば登場するが、そんなものは所詮男性作者の創作上の表象に過ぎないというシニカルな評価が与えられることが多い。しかし、それなら女性作者の描いた男性登場人物はどうなるのか。プロバやエウドキアの作品が貴重であるのは、女性が描く男性像を提示してくれている点であろう。両者の作品中、もっとも顕著な男性登場人物はイエス・キリストである。プロバのイエスは、アエネアスの勇気と雄弁さを示し、エウドキアのイエスは予定された死まではトロイの英雄ヘクトルで、復活のイエスはオデュッセウスで示され、女性たちに救済の道筋を示す。彼女たちのイエスは、古代末期の女性たちが選び取ろうとする自己自身 (エージェンシー) を映し出していると見て間違いのないであろう。

虚構の語り手

－『パルチヴァール』にみる諷刺の様相－

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (?-1215) によって、「兎の仲間 (Tristan, 4638)」として揶揄されるヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ (um 1160-um1220) であるが、彼の滑稽かつ諧謔に富んだ複雑な表現様式は『パルチヴァール』(Parzival, um 1200) の解釈を一段と困難なものとする。作品の受容者はヴォルフラム独自の言い換え形式や否定表現など、笑いを誘うユーモラスな語りを行う語り手の姿を認めることが可能であるが、時に猥雑かつ場面にそぐわない表現手法は、受容者に強い違和感を与える。本発表では、この特殊な語り手の存在に焦点を置きつつ、その語り手が持つ諷刺要素と物語の関連について中心的に論じる。なお、『パルチヴァール』はアーサー王物語に属する作品であり、愚かな主人公パルチヴァールが騎士の教えを受けて成長していき、最終的に聖杯城の主になるまでが描かれる。

作品の語り手によってなされる、いわゆる「自己弁明」において、問題を含む箇所の一つが「私に(語りを)求める者は皆、これを書物とみなしてはならない。私は一文字も知らないのである。」という言葉である。ここでヴォルフラムを文盲として見るべきではなく、この表現を通して、著者による「語り手」の構築がなされているとする見方が昨今のヴォルフラム研究において支持を得ている(Bumke, 2001)。また、「書物」という表現については、学術的書物ないしは作品の原典をそのまま写したような作品を指し、さらには学識を身につけてそれを誇示するハルトマン・フォン・アウエ(um1160-um1210)や、その他の詩人らを意識して書かれたものであるという見解が定説となっている(Spiwok, 1981)。虚構の語り手による「書物」という表現を用いた自己の無教養は、「論争のための誇張表現」(Nellmann, 2017)と見るべきであり、ヴォルフラムの「卓越した遊戯」(Dallapiazza, 2019)の一つである。そこで用いられた戯けや虚構によって、作品の受容者である聴衆は、その表現をある「語られるもの」として認識する。(Bumke, 2004) これにより、作品を聴衆に伝える現実の語り手と、作品内の語り手による発言の結びつきがとかれ、受容者は虚構の語り手の背後にある詩人ヴォルフラムの姿を認識することになる。

本研究はこのようにヴォルフラムによって構築された虚構の語り手が、「自己弁明」や難解さの点でこれと双壁をなすプロローグ、さらには物語進行との関わりの中で、いかなる諷刺の機能を持つかを検証するものである。その際、語り手の特徴的な叙述の手法に見られる道化性についても留意しつつ、プロローグ内で行われる「愚者」と「賢者」についてのディスクルスが示すものを明らかにしていく。ここで主題となる愚者および賢者は、難解な物語に対する受容方法に関わるものであり、ヴォルフラムは語り手を通して、聴衆に対して適切な姿勢を要請するのである。これは同時に、先述のゴットフリートならびにハルトマンらのような論敵への諷刺として機能するため、口誦でなされる一般レベルでの作品伝達と、特定の詩人を対象とした諷刺という、二つの側面に配慮した分析が必要となる。

はだしの王さま

ードイツ王ウィレムと贖宥状ー

「1252年の聖金曜日(3月29日)、王ウィレムは、ウールの僧服に身を包み、裸足でブラウンシュヴァイクの町を歩き、聖人たちに捧げられた諸教会を訪れ、惜しみなく施しを与えることで、敬虔と恭順の模範例を示した」。『エアフルト編年誌』が語るこの場面は、ドイツ王ウィレム(在位1247-56年)が、ブラウンシュヴァイクにおいて北ドイツ諸侯たちから追認選出を受けて、自身の支持層を堅固にした数日後のことである。

ウィレムは、シュタウフェン家の神聖ローマ皇帝権に対抗するために教皇権によって擁立されたドイツ王である。かつての研究においてウィレムは、シュタウフェン朝とハプスブルク朝のあいだの「弱い」王のひとりに数えられてきた。しかし、2022年のイングリット・ヴェルトの研究は、ウィレムの支配実践を再検討し、その王権が帝国のほぼ全域で受け入れられていたことを実証した。冒頭に挙げた聖金曜日のウィレムのふるまいについてヴェルトは、「カノッサの屈辱」以降教皇権への服従を示す所作となった「王のはだし」が、教皇権の文脈とは無関係に、王の恭順さと統一的な王権を表現する行為として機能したと述べている。

本報告は、聖金曜日のウィレムの行動に至るまでの過程を先行研究とは異なる視点から考察することで、新たな見解を提示する。カギとなるのは、1251年から1253年までウィレムへの支持拡大のために神聖ローマ帝国へ派遣された教皇特使ユグ・ド・サン・シェルが発行した大量の贖宥状である。中世中期における贖宥状は、個人に向けて販売されるものではなく、高位聖職者から教会・修道院・病院などの宗教・慈善施設に付与される特権状の一種だった。贖宥状を獲得した宗教・慈善共同体は、文書に記された条件を満たした信徒に贖宥を認定する権限を得たのである。近年の西洋中世学では、贖宥状とその発行権をもたない世俗君主の結びつきが注目されている。本報告は、教皇特使ユグがウィレムに随行する間に発行した約150通の贖宥状をおもな史料として、ウィレムの王権伸長の過程とユグによる贖宥状発行を関連づける。

まず、ユグによる贖宥状の月別発行数をみると、ウィレムとユグがブラウンシュヴァイクとその周辺に滞在した1252年1月から3月までの約2か月間に40通が発行されたことがわかる。この発行頻度は、同時代において並外れて高いものだった。王ウィレムは、教皇権の代表者と新たな宗教実践をともなう現れた先進的な王とみなされたことが推察される。次に、ユグが贖宥状を用いてウィレムの支配を演出しようとした事例を取り上げる。信徒に対して贖宥を認定するための代表的な条件として、特定の祝日における教会訪問があった。ユグは司教座教会宛ての贖宥状において、ウィレムの追認選挙が行われる3月25日(マリア受胎告知の日)に贖宥獲得可能日を設定することで、当日の「観衆」を作り出し、王権の承認を広く知らしめようとしたのである。以上の考察を踏まえて聖金曜日のウィレムのふるまいに改めて目を向けることで、ウィレムの姿が贖宥を求める者の模範であり、人々の魂の救済に配慮する王であることを表現したものであると本報告は結論づける。本報告の結果により、「ドイツ大空位時代」を教皇権との関係から再検討する必要性も示唆されるだろう。

アポストリの女性たち

—13 世紀イタリア半島北中部における司牧革命・ジェンダー・異端—

12 世紀末以降のラテン・キリスト教世界では、特に低地地方や地中海沿岸部を中心に、伝統的な修道制や聖堂参事会の枠組を超えた「キリストへの追随／使徒的生活」の希求が活発化した。多くの非聖職者信徒が、隠修生活を営み、苦行や贖罪に努め、説教・巡礼や寄進を行い、自身の救済を能動的に追求した。同時期のローマ教会が聖職位階制による信仰実践の独占的管理を推進すると、こうした信徒たちの大多数は托鉢修道会やその第二会に吸収されていった。しかし、そうした包摂に至らなかった一部の信徒には、「異端」の烙印が押された。ヴォルペやグルントマンの研究によってよく知られているように、これらの「宗教運動／異端集団」の担い手には、多くの女性が含まれていた。

20 世紀後半以来の女性史・ジェンダー史研究は、こうした一連の流れにおける女性たちの活動を、中世における女性の宗教性の開花・表出・抑圧という枠組で捉えてきた。特にイタリアの研究者たちは、女性の独自性・主体性に注目する傾向を強く有し、男性（聖職者）との差異や対立という側面を強調している。そのため、12 世紀末に始まる女性たちの信仰実践の活発化は、①聖職者中心化（男性化）が進む教会の規範の拒絶、②それに伴う教会制度との対立と抑圧、ないし③司牧活動を通じた体制への回収、という図式で論じられてきたのである。特に最終的に「異端化」する女性たちは、教会による信仰生活の規律化への抵抗者として、近年でも多くの注目を集めている。

しかし、教会による規範構築と女性の主体性を対置する上記の枠組は、理念的な対立項に大きく依拠しており、具体的な事例研究を踏まえたものではない。むしろ、両者の差異の過度な強調は、聖職者と女性の峻別を企図した同時代の教会指導者たちの理念を歴史的現実には投影することに繋がっているのではないだろうか。「聖職者と俗人」や「正統と異端」をはじめ、制度的教会と何らかの主体の二項対立を措定する姿勢が批判されて久しいことに鑑みれば、女性と「異端」という問題系に対しても新たな分析の枠組が求められよう。

以上の問題意識のもと、本報告では、13 世紀末から 14 世紀初頭のイタリア半島北部で活動した「アポストリ」集団を事例として取り上げ、そのネットワークと信仰実践における女性たちの役割に光を当てる。アポストリは、もともとは在俗教会や都市政府の支援を受ける俗人説教者の集団であったが、教皇権との対立の結果として「異端化」し、抑圧された。先行研究は、集団に参加していた多くの女性が、男性たち同様に遍歴説教者として活動していたと想定している。しかし、史料にもとづいてその図式を検証し、彼女たちが担った役割やその実践を検証する作業は未だなされていない。本報告では、年代記史料および異端審問記録に依拠し、「異端化」前後のアポストリにおける女性の活動・役割を、特に司牧的な信仰実践やそれをめぐる規範の「正統と異端」の境界を超えた浸透という視点から明らかにする。アポストリの事例は、教会による規律化・規範構築と女性たちの信仰生活の関係を、対立・抑圧とは異なる視点から捉え直すための手がかりとなると期待される。

5. 高野 禎子 TAKANO Yoshiko (清泉女子大学名誉教授)

西洋中世美術の視点から見るジョサイア・コンドル

—来日前を中心に—

ロンドン生まれの建築家ジョサイア・コンドル (1852-1920) は 1877 年 (明治 10) 24 歳で来日し、工部大学校 (現在の東京大学工学部) にて教鞭を執った後、民間の建築家として活躍。足かけ 44 年の生涯を日本で過ごした。発表者はコンドル最晩年の邸宅建築として知られる清泉女子大学本館 (旧島津家本邸・重文) において、没後 100 年の記念行事として現存するコンドル建築 9 件の関係者を招き「コンドル・サミット」を企画・実現した (2021 年 7 月)。その準備過程で行ったロンドンでの現地調査の結果、従来の研究ではあまり注目されてこなかった問題と出会った。

一つはコンドル来日前の関心事について、である。現在残されている彼のスケッチ帳には、来日前に訪れたキリスト教聖堂やステンドグラスの模写がある。調査を通して当時のコンドルの関心事の一端が浮かび上がる。もう一つは、若きコンドルを取り巻く人間模様について具体例を通して探ること、である。特に祖父で同名のジョサイア・コンドル (1789-1855) の存在や、建築の師 W.バージェスをはじめ修業途上でコンドルが出会った作例をあげながら、以下の順序で検証する。

はじめに —最晩年の肖像画より—

I. スケッチ帳にみるステンドグラス他の模写

現在東京大学工学部建築学科にはコンドルのスケッチ帳が残されている。その中に来日前のステンドグラスの模写が 5 点存在する。丁寧に彩色されたスケッチには日付けや地名も添えられており、英・仏・伊の旅の途上で描いたことが明確にわかる貴重な資料である。調査の結果、聖堂名や窓の位置、図像主題などを特定することができた。他にシャルトルやルーアンなど中世建築で有名な聖地も訪れており、建築の部位、彫刻、民家などを描いている。当時彼はどのようなテーマに関心を抱いていたのか、残されたスケッチを通して考察する。

II. コンドルと周囲の人々

祖父のジョサイアは 19 世紀前期に活躍した辣腕編集者で、全 30 巻に及ぶ『世界旅行者大全』の著者でもあった。祖父の死はコンドル 3 歳の時である。さらに建築の師 W. バージェス (1827-81)、助手でステンドグラスの師 H.W. ロンズデール (1844-1919) など、コンドルが修業期に目にしていたであろう具体例を取り上げて、彼の美的感性が育まれた土壌を考えてみたい。

結び —コンドルの独創性とは—

故鈴木博之氏「お雇い建築家ジョサイア・コンドルの実像」(『學士会会報』2010~12 年、6 回連載) を礎に上記の新知見を加え、来日前のコンドルの“素顔”に迫りたいと思う。